

# 「遠藤イズム」の醍醐味を 発見する旅に出掛けよう！！



千葉商科大学遠藤隆吉研究所 所長  
商経学部 教授

**趙 軍**  
ZHAO Jun

## プロフィール

1976年鄭州大学歴史学部卒業、1982年歴史学修士、1987年歴史学博士(华中師範大学大学院)。1998年千葉商科大学商経学部助教授、2001年同学部教授。専攻分野は中国近現代史と日中関係史。著書に『大アジア主義と中国』亜紀書房 1997年、『中国における大アジア主義～「聯日」と「抗日」のあいだ』ミネルヴァ書房 2018年など。1995年財団法人孫中山研究会堀川哲男記念賞を受賞。

本学の創設者である遠藤隆吉先生は、一生涯、一教育者として巣鴨高等商業学校など一連の教育施設を建て、実社会に役立つ学問である「実学」を基盤とした教養と学力を持つ大勢の学生を世に送り出したばかりではなく、ご自身も社会学・哲学・東洋哲学史・教育学・政治学・心理学など一般の「学問家」にとってはあまりにも広すぎる複数の領域を見事にまたがって、「著述等身」(著作が作者の身長に等しいほど多産なことをいう形容詞)とも言えるほど多くの著書・講演集(『巢園自伝』の集計によれば、80冊以上)を著した研究者で、学問家でもあった。その学問的研究分野と領域は広く、各領域に対してそれぞれ独創的発見と見解を展開し、数々の新しい理論と主張を提起していた。これらは実に本学のみならず、私たち現代を生きる人々にとっても大きな精神的・文化的遺産であると思う。筆者はあえて高柳忠二学士と『遠藤隆吉伝』著者である蝦名賢造氏の知恵を借りて、改めて遠藤隆吉先生の学問的探究・理念及びその成果を「遠藤イズム」

と名付け、最大の敬意を表したい。「遠藤イズム」の全貌を描くことは大変困難な作業であるが、『CUC View & Vision』の紙幅を借りていささか管見を述べさせていただき、「遠藤イズム」の醍醐味を発見する旅のガイドブックにしたい。

## 1 「遠藤イズム」と中国

遠藤隆吉はまず漢学者・哲学者であり、中国哲学史に関する研究は生涯の研究テーマの一つであった。

陳威縉の研究によれば、「現代学科体系の視角から、『中国哲学』と『中国哲学史』の概念の始まりが日本の明治時代に見える。『支那哲学』(中国哲学)を含む『東洋哲学』の教育のために、当時は中国哲学史を撰述するのが必要になった。1916年以前、松本文三郎、遠藤隆吉と高瀬武次郎はそれぞれ『支那哲学史』を書いた。それはいまの中国哲学史の最初の様態で、当時の日本が西洋哲学を通じて中国哲学を構成する試みであると言える。哲学性を重視するので、宋、明の部分に朱子学、陸王学派しか考察しない、などの特徴もその頃に成立した。その後、日本の中国哲学史の描き方は変化が起こったが(例えば狩野直喜『中国哲学史』)、中国に対する影響と言え、1916年以前の『支那哲学史』撰述のほうが代表的である」という<sup>1</sup>。つまり、遠藤隆吉を含む近代日本の漢学者たちは、教育の必要から、「中国哲学」の概念を作り、「中国哲学史」の研究を始めた。彼らは「中国哲学」と「中国哲学史」の開拓者であった。やがて、日本の漢学者たちの試みが「本場」中国の知識人に影響を及ぼし始めた。「中国の場合に、清末民初の知識人は日本に影響されて、日本の学

1 陳威縉「<中国哲学史>という概念の伝播と発展——日中交流の視角から」、『京都大学学術情報リポジトリ』[https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/215817/1/K.E.P.\\_2015\\_74.pdf](https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/215817/1/K.E.P._2015_74.pdf), 2023年7月25日。

術現代化の表現をこの頃に受容した。……最初の作品は謝无量『中国哲学史』(1916年)であった。しかしこの本は高瀬武次郎『支那哲学史』の単なる模倣に過ぎなくて、独創性が低い」と陳威縉は指摘した<sup>2</sup>。中国哲学史という一つの分野だけ見ても、日本の漢学者たちの学術的貢献の大きさをうかがえる。

そして、一方、遠藤隆吉はまた社会学など「西洋」の学問を近代中国に伝えた仲介者・解釈者の一人でもあった。

「新文化運動」の旗手とされる胡適は、かつて「近年来孔教(儒教を蔑む当時の用語——筆者)への攻撃が最も有力な二人の勇将」の一人として呉虞を称賛し、「四川省において片手で孔家店(孔子とその弟子たちを蔑む当時の用語——筆者)を猛撃した老英雄」として同氏の儒教反対の論理と言論を高く評価した<sup>3</sup>。呉虞の儒教反対の思想とその方法論を紹介する際、胡適は、呉虞の自述を引用した形でその思想的淵源を次のように説明している。

「不佞丙午游東京、曾有數詩、注中多非儒之說。歸蜀後、常以六經、《五禮通考》、《唐律疏義》、《滿清律例》、及諸史中議禮議獄之文、與老、莊、孟德斯鳩、甄克思、穆勒約翰、斯賓塞爾、遠藤隆吉、久保天隨諸家之著作、及歐美各國憲法、民法、刑法、比較對勘。十年以來、粗有所見。(不才の私は丙午の年(1906年——筆者)に東京を遊歴し、数本の詩を著し、注釈の中に儒学を非難する説が多かった。蜀に戻った後、時々、六經・『五礼通考』・『唐律疏義』・『滿清律例』、及び諸史籍の中の礼と獄を議論する文を、老子・莊子・モンテスキュー・ジェンクス・ジョン＝ミューラー・スペンサー・遠藤隆吉・久保天隨諸氏の著作と欧米諸国の憲法・民法・刑法と比較して研鑽し、十年來、多少の所見を持つことになった)」<sup>4</sup>。

ここには、呉虞が遠藤隆吉らのどのような著書を読んで「多少の所見を持つ」結果になったかの説明がなかったが、遠藤隆吉らによる近代科学・知識の紹介は近代中国知識人の「西学」に関する啓蒙に対して、無視できない役割を果たしたことは事実であると分かる。譚汝謙氏らの集計によれば、遠藤隆吉の著述のな

か、『社会学』(歐陽鈞訳、商務印書館、1911年)、『近世社会学』(覃寿公譯、上海泰東書局1920年)などが早くも中国語に翻訳・出版されたという<sup>5</sup>。

日本でも活躍していた革命家兼今文経学派(『公羊伝』を通して『春秋』に託された孔子の根本理念(微言大義)を究明する学問をいう)の「最後の大家」とされた章炳麟は、著書の重訂本『尙書・訂孔』の冒頭に遠藤隆吉著の『支那哲学史』を取り上げ、「守旧」的学風への批判を賞賛した。

「西洋経験と近代日中交流における思想連鎖」という視点で近代日中交流における思想・知識の連鎖を考察する際、日本人知識人がこのプロセスにおいて果たした役割は非常に重要であることは言うまでもない。かつて「中国」→「日本」の間の文化的架け橋を担っていた「漢学者」たちは、今度また、「西洋」→「日本」→「中国」の間の文化的架け橋になり、西洋と中国との間の思想・知識の連鎖において、漢学者ならではの「東洋的」教養と知識を最大限に生かしながら、それを「西洋的」近代学問の解釈と伝播に活用したことは、興味深い歴史の事実である。彼らは「西洋」の近代的思惟と新しい知見を活用して「漢学」を再解釈・再定義し、また一方、「漢学」の伝統的学問に「西洋」の近代的・科学的エッセンスを注入し、「漢学」に新しい生命力をもたらした。彼らの努力のもとで、「西洋」の学問が「東洋人」にとっても馴染みやすい知識になり、「西洋」の学問を理解するには「東洋」の学問が欠かせない「鍵」になるかもしれないという「東洋」の伝統的知識・文化の有用性も再認識された。この意味において、彼らの貢献は決して単純な「西洋」学問の翻訳・解釈ではなく、「東洋」の近代的学問の構築者であるともいえよう。この視点から見ても、遠藤隆吉の人文科学関連の著書とその思想が近代中国の知識人にどのような影響を与えていたかは、大いに研究すべき課題であると考えられる。

## 2 「漢学の革命」から「革命の漢学」へ

「遠藤イズム」と呼ばれるほどの遠藤隆吉の学問的な最重要な貢献と言え、東洋と西洋の学問の精髓を

2 前頁 注釈 1 に同じ。

3 「維基文庫」(《吳虞文錄》序), (<https://zh.wikisource.org/wiki/%E3%80%8A%E5%90%B3%E8%99%9E%E6%96%87%E9%8C%84%E3%80%8B%E5%BA%8F>), 2023年7月25日。

4 同上。

5 譚汝謙主編『中国訳日本書綜合目録』、香港、中文大学出版社1980年、317-318頁など。

吸収したうえ、それを整理・批判・分析などの工夫を経て、「人文東洋主義」「生々主義」「漢学の革命」等の理念に昇華させた主張と理論の数々である。

例えば、明治維新以降の日本において、大勢の日本人が西洋文明を取り入れることに没頭し、儒学を中心とする漢学が没落の一途をたどった。清朝晩期の外交官・詩人黄遵憲が至近距離で近代日本を観察し、「維新以来、広事外交、日重西法、於是又斥漢学為無用、有倡言廢之者。雖当路諸公知其不可、而漢学之士多潦倒擲棄、卒不得志（維新以来、外交を広く展開し、西洋のやり方を重んじ、漢学を無用な長物を見なし、廢棄すべきだと唱えた者も現れた。政府の権力者はその不可を知りながら、漢学の士人の大半はすでに落ちぶれて、鬱々として志を遂げられないでいる）」<sup>6</sup>という社会現象を発見した。つまり、「西洋文化」の前に漢学を代表とする「東洋文化」が「無用」な学問と見なされ排斥されていた。

黄遵憲はまた、漢学が近代日本で衰退し続けた理由として、①「伝統へのこだわり」＝「保守的姿勢」、②「進取的近代社会への対応の遅れ」＝「役に立たない学問」の二点にあるとまとめた。表面的には問題点が二つ存在しているように見えるが、実際は内部で繋がっている一つの思想的・文化的課題、すなわち、漢学の「近代化課題」である。近代社会の需要に対応できない学問であれば、漢学のみならず衰退していくしかないのである。1910年代末期に始まった五・四運動と「新文化運動」の中に中国の知識人たちが「打倒孔家店」を「新文化」提唱の旗印にしたことから見ても、これは日本だけの課題ではなく、漢学の「祖国」である中国においても、同じ文化的・時代的課題に直面していた。

漢学の近代化という時代的課題に対しては、日本の漢学者たちが一番早く動き出した。1870年代から1910年代までの間、井上哲次郎、市村瓚次郎、林泰輔、遠藤隆吉ら研究者が漢学に対する反省と改造についてさまざまな試みを行った。例えば、遠藤隆吉は『漢学の革命』（東京育英舎、明治四十四年）を著し、漢学の二面性について問題提起した。

「漢学の二字は一面陳腐固陋なるが如く、一面

剛健不拔なるが如く善と悪との両極端なる聯想を同時に起し、所謂 X の範疇なるを以て善と思へば善、悪と思へば悪、何れにも解釈せられ得べければなり。」<sup>7</sup>

つまり、伝統的漢学には「善」と「悪」という二つの側面があり、近代社会を生きる人々にとって、それを見分ける眼力が必要であるという視点である。

漢学の全般をすべて「悪」と思えば、「漢学無用論」に陥りやすく、すべて「善」と思えば、逆に伝統的学問を「墨守」する立場に陥ってしまう。どちらも時代の需要に対応しきれない姿勢になるので、弁証法的視点で漢学を二分する視点は実際もっとも合理的・科学的手法と言えよう。

漢学が持っている「善」の具体例などについて、遠藤隆吉は

「自分の見る所では、漢学も亦日本人に取つては種々の利益がある。即ち日本国の文明の淵源を知らせるといふ意味に於ても、また文字を知らせるといふ意味に於ても、日常の道德を知らせるといふ意味に於ても、精神修養法を教へるといふ意味に於ても、皆人間の利益ある所のものである。其上人間の思想を高尙にするといふ所に非常に意味がある。」<sup>8</sup>

と説明した。つまり、漢学は古代中国知識人たちの知恵の集約だったが、人間の自己修養や社会生活、政治・経済・文化活動など多方面にわたり基本的または根本的な原理・作法などを内包しているため、中国人だけではなく、日本人や世界の人々にも有益性を持ち、「皆人間の利益ある所のものである」。そして、漢学者は漢学に涵養している有益性を明らかにし、実践活動を行うことが「肝要であり」、これこそ、「漢学の革命と謂ふことの目的は達せられる訳である。」<sup>9</sup>言い換えれば、「実践」「運用」することを第一義的に取り扱うことは、伝統的漢学の問題点を克服する漢学の「再生」であり、「漢学の革命」である。

「漢学の革命」を実現するには、「教育者」（教科書と教育法などを含む）と「学習者」はそれぞれの立場から双方向の努力をしなければならないと遠藤隆吉は考えている。

6 黄遵憲「日本国志」卷三十二・學術志一、陳錚編『黄遵憲全集』下、中華書局 2005 年、1404～1405 頁。

7 遠藤隆吉『漢学の革命』（東京育英舎、明治四十四年）、「序」頁一。

8 『漢学の革命』、頁七。

9 『漢学の革命』、頁八。

まず「教育者」側の努力内容について、漢学の中身はほとんど二千年前から蓄積し始めた知見であり、その多くはすでに現代社会に通用しなくなった文章表現（いわゆる「漢文」、中国語では「文言文」）で記録されている。そのため、「書物から引き離す」の第一歩としては、漢籍のテキストに対する「解釈」が必要であり且つ重要である。その上、漢学の精髓が抽象的な内容を中心とする「精神的」面にあるとすれば、現代社会を生きる人々に理解させるには、現代的な要素を取り入れて分かりやすく「解釈」し、場合によっては「翻訳」する必要もあり、この「解釈」の作業を行う際、現代社会の状況と要請に「当て嵌まる」ことは最も重要な原則であると、遠藤隆吉は考えていた。

漢学の普及において、遠藤隆吉は「聴衆を満足させる」ことが重要であると考え、教育法の改革と工夫も必要であると強調した。漢学の勉強は「学校の講義」と社会人である「一般人民」への「説教」の二つのアプローチ方法があり、どちらも漢学「解釈」を行う際、「聴衆を厭わせるやうな話」をするべきではなく、「只聴衆を満足させる話をしてやりたい」という努力は重要であると遠藤隆吉は考えている<sup>10</sup>。これは聴衆を迎合するのではなく、聴衆に知見と教養を得る喜びを与え、聴衆に人生の糧を獲得した満足感を与えなければならないという目標設定である。漢学はそのような知見に富んでおり、文字と時代の障壁を乗り越えれば、それを手に入れることは可能であり、適切な「解釈」を通してそれを聴衆つまり「一般の人民」の実際の生活に「応用させる」ことができれば、それが漢学普及の到達点と考えられる。

一方、学習者側の努力について、遠藤隆吉は実社会・実生活へのワンランク上の「応用」をめざすべきであり、これを「漢学の革命」の目標と意義の一つとして位置づけた。その具体例として、遠藤隆吉は『老子をして今日に在らしめば』（早稲田大学出版部大正十四年二月発行）を著し、「西学」の近代的視点と理論を駆使して、老子思想の中に潜んでいる「近代的視点・近代的要素」を再発見し、それを近代的社会生活の各方面に運用させようとした。

例えば、遠藤隆吉は老子思想の核心を「虚」「静」「無」の三要素にあると概括し、「虚」と「無」の中に知恵が

あり、「虚」と「無」を政策に運用すれば、社会にある矛盾や対立を和らげ、社会の「勢」を良性の方向に転換させることができる（言い換えれば、「無」の境界に入ること）。執政者はもちろんのこと、社会の一般の人々も「此様な思想を以て一切問題の解決に当たらなければならぬ」と提案した<sup>11</sup>。

『老子をして今日に在らしめば』の中に、遠藤隆吉は「社会的方面」「社会思想、社会思潮領域」「人間関係とビジネス分野」「肉体的方面」などさまざまな方面において、数々の身近な場面と事例を取り上げ、さらにヨーロッパの思想家や政治家たちの老子評価も取りあげ、老子思想の「今日」的運用に向けて有益な試みを行った。

### 3 「遠藤イズム」の継承と発揚をめざして

遠藤隆吉の老子研究を通してみられるように、時代の更迭と「新」「旧」学問の交代に巡り会ったこの時代の日本の「漢学者」たちは、歴史の責任感に鼓舞され、身に付いた伝統的学識と教養を駆使して、ヨーロッパの近代科学と人文知識をアジアに紹介・解釈し、「西洋」と「東洋」の思想的・文化的架け橋となり、有益な学術的活動を行い、今日まで続く近代東アジア諸国の「共同知」の摸索と構築に貢献したと言えよう。これこそ、先哲たちが私たちに残された最大の精神的遺産ではないかと思う。遠藤隆吉研究所は、「遠藤イズム」即ち、本学の建学者遠藤隆吉博士が残してくれた豊富で膨大な精神的遺産（事績、著作、遺蹟など）の継承と発揚をめざして遠藤隆吉の事績・業績にかかる総合的研究を行うために設立された研究機構である。学校法人千葉学園・千葉商科大学及び附属高校の学園史も併せて行いたい。

新しくできた「遠藤隆吉研究所」の当面の任務と今後の展望・ビジョンに関しては、次の4点にあるのではないかと考えている。

①遠藤隆吉先生関連資料の蒐集と整理。遠藤隆吉先生の著述活動は多方面に亘り、著書とその他の講演録・筆記ノート・墨蹟・金石文・写真（可能であれば音声データも）・所蔵品など数多くあるが、これまで本学園を含む関連施設などでは、計画的・系統的に蒐集と整

10 『漢学の革命』、頁三五。

11 『老子をして今日に在らしめば』、28頁。

理することは展開されていない。その蒐集・復元・整理をトータルの・継続的展開していき、さらにこれらの資料のテキスト化とデータベース化は、本研究所の長期的プロジェクトであり、毎年計画を立てて段階的に進めたい。

②遠藤隆吉先生の著述（とりわけ儒学関係の漢籍を中心に）の翻刻・読み下し・現代語訳などの作業。これも長期的プロジェクトであり、毎年計画を立てて段階的に進めたい。例えば、本年度においては、未翻刻資料「家学の手紙」と読み下しのない『学問概論』の活字翻刻・資料化をすすめている。また、この作業の進捗状況に応じ、研究会を開始する予定である。

③現地の調査研究。地域での区画整理や再開発などによって、多くの資料と史跡などは湮滅か紛失する恐れに直面している。本研究所は長期的プロジェクトとして遠藤隆吉先生関連の資料と史跡などの発掘と調査を現地に赴いて確認し、そのうえ保存に関する提案や対策の提出を任務にする。本年度においては、前橋所在の孝経碑ならびに遠藤先生の足跡の調査を展開する予定である。将来的には、習志野や鎌倉などでの関連史跡の調査も展開したい。

④学園創立100周年記念事業として、学生向けの定本の編纂と出版。創立100周年時において、遠藤隆吉先生の事績・業績をまとめた学生向けの定本（決定版ともいえる冊子）を刊行する。遠藤隆吉先生の思想・理念を学生向けの現代語訳をし、漫画風か絵本に近い形で、過去の成果に基づき再編成する作業である。出来れば、これで現代文の決定版にしたい。短期的プロジェクトとして本年度の秋に完成できるよう努力する。

今後本研究所の研究プロジェクトへ参画を考えている学内外研究員の皆様にも、細やかな送り言葉とかアドバイスとか、一言を述べさせていただきたい。

今年7月5日の総合研究センターの設立を記念する座談会の場で、わたしは「巨人の肩の上に乗って知見を拡げ、人生を豊かなものにしましょう」を「遠藤隆吉研究所のモットーにしたい」と申し上げた。人類のたゆまずな発展を図るため、「巨人の肩の上」に立ち、新たな努力を増して行くことは「持続的発展」と「漸進的発展」を実現できる条件・保証ともいえよう。言

うまでもなく、遠藤隆吉先生はその「巨人」の一人である。遠藤先生のような「巨人」に接近する方法はあるのだろうか？答えはもちろん「イエス」です。

「巨人」遠藤隆吉先生に接近する方法は、3つもあるのではないと思う。1つめは「仰視」の視点である。遠藤先生は波瀾万丈の時代を生き、事業と学業など多くの分野においてわれわれに見えるもの（事業など）と見えないもの（精神的遺産など）など膨大な遺産を残してくれた。銅像を立てて毎日、敬意を表さなければならない。2つめは「平視」つまり、水平に真っ正面から見る視点である。ある思想家・理論家に対する最大な尊敬は、彼が提起された問題意識と彼が引き出した結論を改めて考え直し・検証し、彼の貢献を人類が知見と知恵を求める長い登り階段の中の一つのブロックとして評価する作業にあると思う。3つめは「俯瞰」の視点である。「後の者」としてのわれわれは、優劣を判定する資格はないが、「後の者」としての利点がある。遠藤隆吉先生とその同時代に人々がどのような道程を辿って、どのような苦悩と努力を経て、どのような選択を選んでどのような成果や業績を挙げたのかと、われわれが総括・評価できると思う。

全人類の文化的・思想的遺産をトータルのにまとめ、未来時代への道しるべを探そうとしたことは、困難を極める作業の一つであることは間違いないだろう。幸いなことに私たちには、これまで、困難な時代に特異的な模索・努力の末、有益な選択肢を提供していただいた先哲たちを擁しておる。様々な落とし穴や回り道を通らなくても済むのである。特に世界は民族間・国家間・イデオロギー間などの対立が先鋭化している現在、これらを如何に理性的・合理的に乗り越えて、科学的・総合的な針路を選び出すことには、遠藤隆吉先生ら先哲たちの苦悩と探索、そしてそのアドバイスと知見は、今日の私たちにとって、最大の財産の一つとなっていると痛感している。

数人しかいない小さな研究所であるが、所定の目標を達成するため、苦労と工夫を惜しまず、努力してまいりたい。どうぞ皆様からのご応援・ご支持のほど、よろしく願いいたします。そして、私たちと一緒に、「遠藤イズム」の醍醐味を発見する旅に出掛けよう！